レッスン：SPA NO.13

テーマ：分析

SPA13.DOC/ANALYSIS/KE5.15

私の兄弟・姉妹たち、

霊、光、火の子供たち。

私たちは常に主、絶対、神の聖性に抱かれています。

このレッスンでは最近のレッスンで扱われたなかのいくつかのポイントをより明確にします。これらは会員から質問があったものです。

質問：5,10,15,100,1000というように私たち自身が創りだした無数の同一体があり、それらはそれぞれ経験を得ています。それらの同一体が得るそれらの経験は記録されるのでしょうか？それぞれの同一体は経験に気づいているのでしょうか、あるいは同一体はそのオリジナルに戻るのでしょうか？

Ｋ：私たちは自己実現に到達したパーソナリティーについて述べており、それはサイコノエティカルな同一体を作り出すのでしょうか？そうです、前に述べたようにいわゆる意識的意識のセルフ・エピグノシスはそれが２つ、３つ、100であろうと多くの同一体を作り出し、それら一つ一つは特定のパーソナリティー全体を現しています。それらの各同一体は異なった出来事から経験を得るかもしれませんが、モナドの現れの経験は自動的にそれら全てに行きます。というのも、それが一つの同一体であれ無数の同一体であれ問題ではなく、そのパーソナリティーは一つであり、その能力は現在のパーソナリティーの素質的可能性のサイクルの結果として与えられています。そしてそれらの素質的可能性のなかには多様性という能力も含まれています。

そうです、絶対存在の多様性、絶対生の現れとしての生の多様性。無数の生の現れがあり、生としてもそれら一つ一つのモナド・セルフもまた多様性を現わす能力を有しています。

ですから、同一体に戻りますが、そのレベルの現れに到達したそのパーソナリティーはもはや経験は必要としません。しかし、そのパーソナリティーが転生のサイクルに留まる限り、確かにそのパーソナリティーは経験の下にあり、また原因・結果の法則の下にあります。

勿論、その特定のパーソナリティーは不可視のヘルパーとして働き、実存の諸世界の様々なレベルで人類に奉仕しています。あなた方が知っているように、実存の様々な諸世界とは物質界、サイキカル界、ノエティカル界です。形のない不定形の高次ノエティカル界では実際に助けは必要ありません。なぜなら、そのレベルにパーソナリティーが到達するということは、そのパーソナリティーが自己実現に達し、現在のパーソナリティーの諸体をマスターしていることを意味するからです。

質問：それでも、そのパーソナリティーは原因・結果の法則の影響下にあるのですか？

Ｋ：勿論です。彼は何であれ彼が肩にかつぐものの影響を受けます。勿論、そのパーソナリティーが他の人々を助けるときには、相手が受け入れることができるように、相手を助け、相手が被っている結果を自分の肩に背負うことができるように、自らのバイブレーションを下げる必要があります。これが不可視のヘルパーとして奉仕する自己実現したパーソナリティーと、転生のサイクルの下にいない人の違いです。転生のサイクルのなかにいない人も、ある程度までは転生のサイクルの下にある人々を助け、その人が背負うことのできないその人の行為の結果を代わりに背負うことはできます。原因・結果の法則の諸世界における特定の行為の結果を背負うことはできます。しかし、転生のサイクルのなかにいる不可視のヘルパーは人々の深い部分まで背負うことができるのです。それゆえに、自己実現した人々は他人のためにそこに留まる必要があるのです。前に述べたように、最初に自己実現した人、最初に十字架にかけられた人は転生のサイクルを越える最後の人でもあるのです。以前述べたようにある惑星の全人類が自己実現のレベルに到達したときでも、彼らは転生のサイクルを越えないでしょう。なぜなら、彼らは創造界における他の人類に愛を捧げ、抱きしめるからです。同じ太陽系の別の惑星であれ、またはこの銀河系の星であれ、また創造界における別の銀河系であれ、それは問題ではありません。

Page2

それでも彼らは不可視のヘルパーとして転生のサイクルに留まり、彼らの惑星は物質的状態にあります。しかし、勿論人間としての彼らのパーソナリティーはその諸体をマスターしているので、物質化および非物質化の能力をマスターしています。そうです、彼らには肉体がありますが、いつでも必要な時に肉体を非物質化することができ、また様々な異なった場所で必要な数だけ肉体を物質化することができます。

質問：そのような人たちは常に原因、原因・結果の法則の下にある、つまり全ての人が共に行くまでは決して他の諸世界に入ることはないのですね。

Ｋ：そうです、一つの惑星全体における人類として一緒にです。特定の惑星がその目的を果たした、あるいは特定の太陽系がその目的を果たした、あるいは太陽系がその中にある銀河系がその目的を果たした、と神の黙想が聖なるブレーシス（＊神の意志）を現す時です。一つの太陽系はその銀河系の一つの聖なる中心です。なぜなら、そのヒポスタシス（＊状態）は最も低いバイブレーションのマインドの原子として最小の微細なヒポスタシスであるだけでなく、創造界における最大のもののヒポスタシスでもあるからです。ですから、物質の原子のヒポスタシス、人間の小宇宙としてのヒポスタシス、そしてまた惑星、太陽系、銀河系など、そして創造界それ自体としてのコスモスのヒポスタシスとしての構造なのです。

質問：潜在意識とみなされる現れのレベルで、私たちがいかにして多様性を表現するのかがよくわからないのですが。

Ｋ：思考・行動の仕方の結果として、私たちは潜在意識的に無数のエレメンタルを創造しており、それは多様性の表現ではないでしょうか？しかし、またあなたが考え、あなたの思考のなかであなた自身を見るとき、そこでもまたあなたはあなた自身の同一体、無数の同一体を創造しているのではないですか？そうです、あなたの同一体はエレメンタルです。しかしまた、他人があなたのことを考えることによって、あなたのセルフを示すどれほど多くの同一体が創造されているでしょうか？私たちは自分自身の同一体、および他の人々の同一体で満ちた海のなかで泳いでいるのです。それも多様性の表現です。

質問：それでは同一体とは何なのでしょうか？

Ｋ：同一体とは創造されたもの、特定のパーソナリティー、無数の同一体が私たちの周囲にはあります。そして勿論、私たちが創造したそれらの同一体は私たちを無知のなかに押し留めています。それだからこそ、私たちは正しい思考の結果としての同一体を創造するためにワークが必要なのです。欲望想念のエレメンタルではなく、想念欲望のエレメンタルです。

Page3

質問：自己実現したパーソナリティーと自己実現したスピリット（霊）との違いは何ですか？

Ｋ：私たちは今、転生のサイクル、実存の諸世界におり、この転生のサイクルにいるパーソナリティーとして、私たちは生のスパークによって素質的可能性のサイクルを与えられています。そして現在のパーソナリティーが表現する最高のレベルはいわゆる自己実現です。無知にいる間、人間は気づきのレベルに応じて、つまり思考・行動の仕方に応じ、蓋然的可能性のサイクルによってこの素質的可能性のサイクルを変えています。自己実現したパーソナリティーとしての現在のパーソナリティーは魂のセルフ・エピグノシスに入り、その結果、自己実現した魂のセルフ・エピグノシスである魂となります。しかし、そのパーソナリティーが帰還して魂のなかで同化されるまでは、その魂は自己実現した魂ではありません。実際、戻るのはパーソナリティーではなく永遠のアトムです。なぜなら、永遠のアトムはやって来て戻るための乗り物であり、同じスパークから各パーソナリティーを転生させるのですが、このスパークは永遠のパーソナリティー以外の何ものでもありません。

ですから、永遠のアトムは永遠のパーソナリティーと完全に同化することになります。というのも、実際、永遠のパーソナリティーは魂のセルフ・エピグノシスと一つだからであり、今や自己実現した魂があり、それは魂のセルフ・エピグノシスの多様性からそのモナドとしてのセルフを認識することができるのです。

自己実現したパーソナリティー、自己実現した魂があり、その魂がいわゆる二番目の十字架を越えるとき、そのポジションより上に上昇するとき、その魂は私たちがスピリット（霊）における洗礼と呼んだそのミステリー（神秘）を経るのです。火の洗礼は現在のパーソナリティーからスタートし、魂のセルフ・エピグノシスによって完了します。しかしスピリット（霊）における洗礼は魂、二番目の十字架からスタートします。スピリットにおける洗礼というこの生の至高のミステリー（神秘）に関しては、私たちは何も知りません。そして、三番目の十字架、それは神への帰還、それはテオーシス（＊数多くの転生を経た後に到達する成長の最終段階。神との再合一）です。そのとき、モナドとしてのスピリット・セルフはその瞬間から自己実現したスピリットとなり、放蕩息子が父のもとに帰るのです。

ですから、自己実現したパーソナリティー、自己実現した魂のセルフ・エピグノシス、そして今や自己実現したスピリットがあります。創造界全体はこの目的のためにあるのです；モナド・セルフとしてのスピリットがその自己実現を現すこと、それ以外の何ものでもありません。そして創造界全体は神の黙想によるもので、それ以外の何ものでもありません。何であれ“起きること”は神の黙想のなかでのことであり、この神の黙想のなかでは何でもその現れは動き、絶対存在のアウタルキー（＊神の自己充足状態）のなかで動いているのです。この動き、活動のなかで各モナド・セルフによってアウタルキーが表現されているかどうか、それは全く別の事柄です。それはモナド・セルフがどのレベルでそれ自身を表現しているかによります。

質問：動物界および植物界は聖霊的現れであり、エンジェルおよびアークエンジェルの生の息吹がそこにはありますが、彼らも多様性を表現しているのですか？

Ｋ：多様性は生によって表現され、この場合、生はあるレベルまで表現されます。そうです、アークエンジェルは多様性を表現しています。なぜなら、彼らは生それ自体だからです。さて、それらの創造物がその多様性、ある種の多様性を表現するかどうかの権限を持つかどうかはアークエンジェル次第です。そうです、多様性を表現するエンジェルがあり、知っているようにエンジェルは永遠の存在であり、彼らはエネルギーを失うことはなく、永遠に留まって多様性を表現しています。しかし、その表現はアークエンジェルによって彼らに与えられたものです。さて、このエンジェルが他の創造物を創造し、それらの創造物に別の多様性を表現する権限を与えるか否か、それは彼ら次第です。それはアークエンジェルによって与えられた権限の種類によります。

質問：それでは、もし何かが多様性を現した場合、それはどのように現すのですか？

Ｋ：動物界における最も低い現れと言うとき、それは人間に知られている何かではありません。なぜなら、それらはエンジェルの創造物としてもっともっと別の存在だからです。しかし、例えば犬が多様性を現すか否かという場合、答えはノーです。しかし、もし植物界を見れば、一つの種から多くの植物が生じ、種がなくても一本の木からは多くが生じます。動物界でもそのようなケースがあります。しかし、それは特定の種に与えられる素質的可能性のサイクルによります。しかし、日常の生活において知られている種については、創造物、例えばエレメンタルという形での創造物として多様性は表現されていません。彼らは気づきのレベルを表現しておらず、意識を表現していません；彼らは本能を現し、それはその特定の種を受け持つエンジェルによって与えられる場合もあれば、特別のケースではアークエンジェルによって与えられることもあります。

質問：本能は意識から来るのではないのですか？

Ｋ：勿論です。しかしエンジェルあるいはアークエンジェルの意識から来ます。もしある種を見てみると、その特定の種の意識はエンジェルの意識であり、その特定の種においてその種が示す本能の表現全てはそのエンジェルまたはアークエンジェルの意識と結びついています。それ故に、善悪に関わりなく特定の動物の経験はその種全体へと伝わるのです。例えば、ある特定の動物が何か良いことを経験すると、その惑星上に生息する同種の全ての動物がどこにいようとも自動的にその経験を取り入れるようになります。これは科学者たちによってたびたび証明されています。しかし、科学者たちは、実際に何が起きているのか、どのようにしてその特定の種に属するすべての動物たちにその経験が伝達されるのかについては理解していません。自動的に伝わる理由は、それらの動物たちは全て一つの意識と結びついているからです。動物たちはいわゆる本能的意識を表現しており、生の息吹を現し、アークエンジェルそれ自体の生を現しています。しかし、生それ自体を現わしているのではありません。

質問：アークエンジェルのやるべき仕事、任務とは何ですか？

Ｋ：アークエンジェルの任務とは、聖霊の手となることです。私たちの兄弟であるアークエンジェルたちは聖霊の手なのです。確かに、人間も同時にアークエンジェルなのですが、しかし人間は無知のなかにいる間は、自分のアークエンジェル的ヒポスタシス（＊状態）を現していません。人間が最初の十字架に到達すると、そのとき人間は自分のアークエンジェル的ヒポスタシスを現わすようになり、兄弟であるアークエンジェルと共同作業をするようになります。しかし、その時、その人の現れは特定のアークエンジェルのヒポスタシスに制限されることはありません。人間には制限がありません。なぜなら、人間のセルフ・エピグノシスは、アークエンジェルのように創造界のなかで特定の仕事だけをする、特定の仕事だけに奉仕する、特定の任務だけを行う、というようにはプログラムされていないからです。人間はどこに行こうと自由です。

勿論、前に述べたように、現在のパーソナリティーとして実存の諸世界に入るとその意識は制限のなかに入ります。そうなると、セルフ・エピグノシスは意識の異なったレベルにおいて表現されます。初めての転生として人間が物質界で初めて自分自身を現すとき、その人間は本能的意識のセルフ・エピグノシスのレベルで意識を表現し、それは他の動物とそれほど変わりません。そのような現れがどれほど長く続くかはそのパーソナリティー次第です。勿論、違いはあります。なぜなら、たとえそれが非常に低いバイブレーションではあっても想念体が現され、ゆっくりと徐々に経験を通じて人間は潜在意識的意識のセルフ・エピグノシスを表現し始めます。勿論、人間は数多くの長い、長い転生を通じてこのレベルの意識の現れに留まります。そこでは人間は意識的ではなく、潜在意識的に生きています。その人がいわゆる意識的意識のセルフ・エピグノシスを表現するようになるまでは、その人は機械的に生きていきます。実存の諸世界にいる間にパーソナリティーが表現できる最も高い表現は、超意識的意識のセルフ・エピグノシスです。これは勿論、すぐに始まり終わることではありません。その意識のレベルでそれが起きるようになるためには多くの転生を重ねる必要があります。これは火の洗礼の始まりであり、生の特質をより多く現した結果として得られる多くのパワーと能力を表現し始めるようになります。

Page5

ですから、私たちは現在のパーソナリティーを活性化し、現在のパーソナリティーに生を与えるスパークの特質を現すように努力すべきです。無知にある間は、私たちは生それ自体からは何も現していません。それゆえ、無知の中にいる間は現在のパーソナリティーは神のアイコンであり、似姿ではないのです。私たちはアイコンを破壊し、神の似姿を現すようになるべきです。

実際、四面ピラミッドの中ではなく、四面ピラミッドの下にいる無知な状態にある間は、それは影でさえなく、生の現象でもなく、それはまさに影の影にすぎません。それは真の現象の現象です。意味することがわかりますか。なぜなら、人間が現在のパーソナリティーの自己実現に到達した時でさえ、その人はまだ生の現象だからです。しかし、その場合、その生の現象は生それ自体によって提供された素質的可能性のサイクルの可能性を完全に表現しています。しかし、それでもその人は生の現象であり、生の真の表現ではありません。ただ、今や現象は生の特質を多く表現しています。

真理の探究者としての私たちの目的はそのレベルの自己実現に到達することであり、それに成功するためには現在のパーソナリティーのワークを行い、思考・行動の仕方を変え、気づきのレベルを上昇させる必要があります。自分の諸体をマスターし、墓から上昇して墓から出る必要があります。なぜなら、無知のなかにいる間は人間は墓のなかにいるからです。自分自身の死体を埋めて、その死体から離れるのです。

私たちのワークのゴールは生としての私たちの本質を表現することであり、生とは愛であり、アガピであり、同胞の人間を抱きしめられるようになることです。それがゴールであり、それは生それ自体の仕事です。それだけです。アガピとしての生は、それが一つであるので、愛であるアガピを生から分離させることはできません。愛であるアガピと生は一つであり、同じです。

質問：テオーシス（＊神との再合一）とニルバーナの間にはどのような違いがあるか説明してもらえますか？

Ｋ：多くの違いがあります。仏教においてニルバーナは人間が到達できる最高のレベルですが、私たちにとってそれは最初の十字架です。実存の諸世界からテオーシスに入ることはしません。私たちは全体、神性には入りません。私たちは引き続き創造の諸世界における現れであり続けます。現在のパーソナリティーとしてのブッダでさえも魂のセルフ・エピグノシスとして存在の諸世界に入ることはできませんでした。なぜなら、転生のサイクルに留まる間は誰も存在の諸世界に入ることはできないからです。何故でしょうか？なぜなら、いわゆる超意識的意識のセルフ・エピグノシスを表現するようになっても、人間はそこに留まって他の人々を助けるので、境界を越えることはしません。

それでは何故ブッダはニルバーナについて話したのでしょうか？なぜなら、誰かが高次ノエティカル体を現すレベルに到達し、境界を越えない場合、その人は形のない表現の世界を体験します。そのパーソナリティー、高次ノエティカル体は実際にイデアの体です。それは現在のパーソナリティーに特定の限界、特定の形を与えることはなく、そのパーソナリティーは広がっていくことができます。それ故にブッダはニルバーナについて述べたのです。なぜなら、彼はこの拡大を体験するようになり、全体のなかでの自分のモナド・セルフを失っていくのでは考えたからです。もし彼がそのまま続けていたなら、彼は全てが一つのなかにあるのではなく、全ては全てのなかにあり、その拡大の状態のなかでさえもモナド・セルフは引き続きモナド・セルフとして留まることに気がついたことでしょう。その状態はまだ存在の諸世界ではなく、テオーシスではありません。テオーシスは生、生それ自体の現れです。ですから、ブッダはテオーシスへの道を示したと述べたのですが、しかしそれは自分自身を道、真理であり生命であると呼ぶ誰かによって成されるでしょう。それはロゴスの誕生の五百年前のことです。現在のパーソナリティーとしては誰も創造界において自分が神である、生それ自体の特質を表現していると宣言することはできません。なぜなら、現在のパーソナリティーとして私たちは生の現象であり、生の現象は生の本質を現すことはできないからです。

私たちが現在のパーソナリティーを去るとき、それはまだテオーシスではありません。なぜなら、現在のパーソナリティーは生の諸世界で表現される必要があるからです。このリアリティーに関しては過去の多くの神秘家がエピグノシス、つまり何らかの “知識”を残しています。そしてこの創造界のこの部分に関しては、永劫あるいは何千年、ブッダの誕生の以前でさえ、人間はエピグノシスの現れとして、内側から来る何かとしてそれを知っていました。しかし、勿論、当時人々はそのリアリティーについて詳しいことは知りませんでした。マヤ、アズテックの人々、古代エジプト人、古代ギリシャ人、彼らはこのリアリティーについて知っていました。彼らは唯一の神を信じており、その神は創造界のこの小部屋における全ての聖なるセンターを示す多様性を表現していたのです。オリンポスの１２の神がありましたが、それぞれの神は創造界のこの小部屋の聖なるセンターを示していたのです。古代エジプト人には１０という数があり、創造の小部屋を示すいろいろなカバラがありました。

重要なことは表面的な知識を現すことではなく、その細部のなかに入ることです。結果へのアプローチは探求を通じてなされるべきです。無知から自由になるために真理を知る必要があります。いかにしてそれを行うか？一生懸命にワークをすることです。現在のパーソナリティーについてワークする必要があり、他の方法はありません。その唯一の道が相対的真理における別のレベルへと導くことができるのです。

この知識を受け取って、読み、受諾あるいは拒否しなさい。そうです、多くの点で他の様々なスクール、グループの信念体系と似通っていると思うかもしれません。しかし、その細部は同じではありません；現象的には多くの点で似通っているかもしれません。しかし、その土台は全く異なっています。

建物を建てるには良い土台が必要です。そしてその土台は、何回も述べたように、その人を真理の探究へと駆り立てるその動機、たとえ他人を助けるという試みであってもその動機について自分自身に問うことによってスタートします。人は役者の衣装を脱ぎ捨てる必要があります。真の現れ、思考・行動の仕方としての自分の裸体を恥じるべきではありません。そのとき初めて、人は自分自身についてのワークをスタートし、より良いセルフ、より良い現れを育て、同胞の人間たちにとって有益な現れとなるのです。

私たちは常に主、絶対、神の聖性に抱かれています。